

ミシェル・ルピサン

JAPN 402

4月15日2014年

小さな闇

吉本ばなの「小さな闇」という話では、主人公が家族についていろいろなことを思い出して、自分の人生についても考えた。クラシックギターが好きな父と一緒にブエノスアイレスに行って、父がギターを買いに行ってる間に、主人公はエビータという人の墓を見に行った。そこで、三年前癌で亡くなった母のことを思い出して、母と父の関係を覚えた。二人は仲良かったが、父が中心になる時に逃げ出して酒を飲む癖があり、母がそういう時に箱に入ってるような感じがしていた。それは、母が小さい時に、頭がおかしくなった祖母に小さな段ボールの家に入れられたからだ。祖父に捨てられた祖母が心の病気になって、祖母を泣かさないように母はその家に入って、大人になってもその暗い思い出がいつも心の中に残っていた。主人公はこういう風に家族の過去を思い出すと、家族みんなが中には小さな闇があることに気づいて、自分もいつか小さな闇ができるかもしれないと気づいた。若い主人公にとって、その闇ができることは怖いより楽しみだった。

この話の面白い点は、恋した後に闇ができるということだと思う。母も祖母も恋人のせいで苦しんでいたけれど、主人公はまだ若くて恋してないからそういうつらさを知らない。この主人公の未経験と母と祖母の悩みを通して、筆者は人生の中での光と闇を現している。光と闇の比較がこの話によく出てくるので、とてもほろ苦い話だと思う。恋のような素敵なことでも暗いところがあり、人が幸せに見えても小さな闇を持っている可能性があるということがこの話を読んでわかった。

主人公の家族が表面的に平和な家族に見えたが、暗い過去があると主人公は言った。私もそれに似たような家族関係を持っている。別に喧嘩とかしないので、表面的に仲良く見えるかもしれないけれど、あまり話しもしないので親しい気持ちはない。仲悪くはないが親しくもない状況だ。特に、両親がとても厳しいので、今までも自分の意見を言うのが怖くてなかなか両親と話できない。その上、今実家で家族と暮らしているから、門限やルールがたくさんあって、自由にできないと思う。その理由で、私も母のように箱に入っているような感じがしている。好きなようにしたり遅くまで出かけたりしたいのに、両親に止められて、どんなに嫌でも反対できないので箱に入れられたようだと思う。

その箱に入れられることの恐れは母の小さな闇だった。主人公はまだ若いのでそういう闇がないけれど、いつか自分にも出てくると期待している。人はみんな中に小さな闇を持っているか、又はいつか持っているようになると思う。恋の悩みや、大切な人が亡くなった後の寂しさや、色々な理由で闇ができる。人は大人になっていくと、色々な経験するし、悲しい時もたくさんあるので、闇ができるということは自然なことだと思う。もちろん、幸せそうな人がいて、「まさかそういう人は闇がないでしょう」と思ってしまうかもしれないが、幸せそうだからといって本当にそうだというわけではない。なぜかというと、自分の中にある闇を隠している人もいるし、あるいはその闇に気づいていない場合もあるからだ。人生の中で、つらい時がたくさんあるから、小さな闇を持つようになることは避けられないことだと思う。

この話は小さな闇を通して人間の弱みを表して、だれでも暗いところが心の中にあるということを表している。だから、読者に自分の人生について考えさせる話だと思う。私もこの話を読んだら、自分にも小さな闇が存在しているかどうかについて考えた。暗い話だけれど、とても現実的なので、読者にとって印象に残る話ではないだろうか。